

「国立駅周辺まちづくりフォーラム」報告書

日時 平成 17 年 5 月 14 日（土曜日） 午後 2 時 5 時
場所 一橋大学職員集会所
司会 三浦卓也（マヌ都市計画研究所）、小西祐子
パネラー 上原公子氏（国立市長）
小谷俊哉氏（NPO 法人グリーンネックレス代表理事）
小西敏正氏（宇都宮大学教授、日本建築家協会（JIA））
澤田浩和氏（NPO 法人 街・建築・文化再生集団（RAC））
武澤敏夫氏（いきいき市民協働ネット、国立駅舎保存の会、ディスカバー
くにたち）
津久井俊彦氏（国土交通省関東地方整備局企画部企画課課長補佐）
林大樹氏（一橋大学大学院社会学研究科教授）
オブザーバー 是松昭一氏 国立市まちづくり推進課 主幹
主催 一橋大学 林ゼミナール、赤い三角屋根の会（国立駅舎を活かす会）
協力 国立駅舎保存の会

（注：文中敬称略。当議事録は、フォーラムの様態を文書化し、まとめたものですが、一部音声
が不明瞭な部分もあるため、フォーラムの完全な記録ではないことをご了承ください。）

（開会にあたって 赤い三角屋根の会 中町仁治）

本日は、パネラーの皆さんから、ハード、ソフト両面からのいろいろな話を聞いて、駅
周辺まちづくりの可能性を探りたい。一橋大学職員集会所という、歴史ある空間で実施で
きることも意義がある。

（その後、資料の説明、パネラー紹介、入場。）

（開会のあいさつ 赤い三角屋根の会会長 伊藤）

自分は 60 年前からここに住んでいる。国立は一橋大学を中心に発展してきた。この場所
でやれることは意義深い。先輩方も努力してこの国立の町を作ってここまで来た。次の世
代にどう受け渡していくか、自分の役割を考えたい。そのためにも今日は貴重な意見をも
らいたい。

（司会より）

今日はテーマが国立駅周辺まちづくり、ということなので、駅舎単体で考えるのではな
く、全体として考えたい。

前半は協働のための手法、経済的手法について考えるためパネラーから意見を聞く。

後半はポストイットで吸い上げたそれぞれの意見をもとに、みんなでこんなことをしよ
うよ、という意見をまとめたい。

第1部 国立駅周辺まちづくりの現状と課題

(上原国立市長)

この企画を用意して下さった皆さんに感謝。職員集会所はすてきな建物だなと感動していた。大学設立当初の建物がいまだに使われている。宝の山がゲーツ橋に埋もれている。まちづくりの元々の発想は、歴史とか文化を映し出す街でなければ魅力はない、というところから。では国立ではどのように展開していくかが課題と思っている。

もともと国立のまちづくりは堤氏が大正末期に 100 万坪を買い取ったことから始まる。その開発以来、80 数年ぶりに、1つの高架事業を基盤に駅周辺の公共空間が新しく生み出される。そのときに街が大きく変わるのか、もともとあった国立の街のイメージをふくらませていくのか、選択を迫られた。

その選択を考えていくきっかけの一つは、国立市民の大事な顔であり、みんなで慈しんできた三角屋根の駅舎がこわされる可能性がある、ということ。この街がどういう街として作られ、発展してきたか、とういことを問い直すきっかけになった。

市民合意として作られてきたビジョンは、昭和 52 年の基本構想で、文教都市国立、緑と文化の薫るまちということが継続してうたわれて、ずっとそれが基本である。明確に学園都市をつくるんだという意志を持って堤氏が国立をつくってきたことがベースになっている。文教都市という法的制度をもって、整えてきたきっかけは昭和 27 年の朝鮮動乱。それ以来このまちは文教都市としても学園都市としても環境を守っていくことをまちの目標にしてきた。堤氏というディベロッパーがハード整備をし、文化の薫るまちにしてきたのは、市民の活動そのものだった。

駅舎の保存についてどうするか、市では平成 11 年から検討。国立駅周辺プラン報告書を作成依頼した。その中で改めて、国立のまちづくりの目指してきたものはなにだったのか明確になった。

堤氏は学園都市をつくるため、ドイツに学園都市とはどういうものか、学びに行った。国立のまちづくりにはイギリスの田園都市構想に加えて、アメリカの近代都市計画が見事に日本の街に融合したハード整備があった。行政として出発点が恵まれている。さらに堤氏は、景観ということをしっかりこの都市計画に盛り込んで作った。これが国立を語る時にははずせないキーワード。関東の富士見 100 景に選ばれたように、景観を位置づけた都市計画を今後どうしていくか、文化の薫るまちとして、文化をどのように街の中に見せていくか、考えなければならない。

ヨーロッパには広場というものを中心に教会や市庁舎があり、広場の中にみんなが集まることで、文化の活動、経済活動が生まれた。そういう広場をどこに作ろうかと思った時に、堤氏は駅前にどんと持ってきた。駅前に降りれば、こういう街だと景観を位置づけて、大学通りという 44 メートルの当時としては途方もない道路、一本筋を通すことによって、文教都市としてのまち全体の風格。そして、駅前の広場。駅に向かっていく人達が、駅前を広場として使う事で、出会いと交流の中から文化が育まれていく。そういう文化が見える空間として駅前広場を作ったのではないか。

そういうコンセプトをこののち 100 年後を目指して作っていくには、私たちは、何の準備をして何の役割を果たしていったらいいだろうかを皆さんに考えていただければ。

国立のまちが本来持っていた魅力と大事なまちづくりの方向性を、駅周辺に限ってというと、私たちは公共空間をどのように利用していったら良いか、庁内で検討会を作って、調査を行い課題を見つけ出した。それから皆さんの参加により、国立駅周辺まちづくり検討会を作っていただき、1年間調査をしていただき、ご提案をいただいた。この大きなラフスケッチを原点に、みんなで話しながら、堤氏の目指したものをもう一度市民の手で魅力あるものに拡大していこう。

まちというのは行政が整備できるが、まちの歴史、風土、文化を創るのはまさに市民一人一人の活動により、大きなまちというのが 100 年経ったときに生み出される。今日はそのための出発となる一日であって欲しい。

現状および取り組み状況

(是松氏)

国立駅周辺は大正末期に例のないまちづくりが行なわれた。このまちが中央線連続立体交差事業によって、大きく変化しつつある。変化に対応して、まちの景観や構造を将来に残していくことが必要。

- 中央線立体交差事業（東京都の事業）の目的

- (1) 交通の円滑化
- (2) 安全性の向上
- (3) 地域の一体化、活性化
- (4) 利便性の向上

- 国立駅周辺まちづくりの課題

- (1) 南北交差道路の整備
 - 総研線跡地の活用を含めて、北側の新しい側道整備
 - 4 箇所踏み切りが解消され、新たに 2 箇所の新しい交差道路が接続
 - 駅周辺では、西一条、都計道 3 - 4 - 10 号線の整備
 - 駅周辺の渋滞の緩和（駅前広場の活用のためにも）
- (2) 国立駅南北駅前広場の再整備と 三角屋根の駅舎の保存活用
 - 国立駅舎をどのように生かし整備するか。新しい駅が高架下ができる。現駅舎に駅機能はなくなり、JR は使わない駅は壊すといっている。高架工事の工事ヤードに現駅舎の立地が必要なため、高架工事の際取り壊す。現時点では、来年夏ごろ解体予定。
 - 市としては、曳きやをして円形公園に移設して欲しい、工事終了と共に元の場所へ戻して、市として活用したいと申し出ている。移転できるのは、三角屋根の切り妻部分。
 - 東京都から、曳きやの片道の移設費用は、国立市が駅舎を財産として活用してい

くならば、連続立体交差事業費から捻出も可能だろうとの見解を頂いている

- 曳いて戻すときの立地は現在 JR の土地である（約 2,000 m²）。その土地をどうするか、今後 JR との協議が必要である。

(3) 国立駅南口公共施設用地の活用

- 現在土地開発公社が所有する土地。現在駐車場、駐輪場として暫定利用。
- 隣接する民間所有地 708 m²をあわせて、4,895 m²を一体的に、どう活用していくか。駅舎の残し方とも関連して課題。

(4) 高架下の活用

- JR との協議により、市としても活用検討。
- 課題への取組み
 - 平成 14 年度 庁内検討委員会 まちづくり課題の抽出、まちづくり課題の整備、整備の方向性の検討。
 - 平成 15 年度 駅周辺まちづくり検討会の開催。商工会、自治会等駅周辺関連団体、学識経験者、公募市民が参加。まちづくり課題の検討、方向性、整備案の提案を受ける。
 - 平成 16 年度 上記検討を基に、市議会特別委員会、及び、市当局で検討中。
- 参考：庁内検討会イメージ図 円形公園写真を見ながら。

円形公園からの富士山はこのように見える。富士見通りからの富士山の眺めは決してベストではないが、そのような街づくりが行なわれていたのだということと、富士山の眺め、大学通り、こういった形でまちを再構築していくことが国立の課題。

(司会)

皆さんのお手元にも国立駅周辺まちづくり提案がまとまりましたという資料が配布されていると思う。是松さんのお話にもあったように、高架駅はほんっとも平成 22 年ころできる。それに伴って駅の周辺にまちづくりの可能性がたくさんできている。例えば南北道路を通し、駅の周辺から通過交通をなくそう、現在は駅前の渋滞がひどいが、人が集まり、かつての国立がそうであったような、駅前から文化が発信できるような楽しいひろばにしようよ。駅舎も文化や交流の基点として活かそう。そのために、駅周辺の公社が保有する用地や JR の土地も活かそう、駅構内のらち外通路を広げ、北口も裏手ではなく、北口としての顔を作ろう等、様々な提案がされている。

これが実現すれば国立開拓以来となる、大プラン(!?)ができている。駅前に文化と人を中心とした拠点を持っていこう、これを実現するのにどうしたらいいのか、今日はそれを具体的に話し合いたい。

第2部 協働への模索

(司会)

パネリストの皆さんより、皆様が取り組まれているお話を、自己紹介も含めてお願いします。

(1) 津久井氏

関東の富士見 100 景パンフレットを参照してほしい。富士山の見えるまちづくりとは、フォトコンテストではない。まちづくりのために集めた。パンフレット表紙も葛飾北斎の富嶽 36 景にある日本橋からの富士山のように、日本は都市の外の自然物を活用しながらまちづくりをすすめてきた。富士見景観をきっかけとして、すばらしいまちづくりをしてほしい、というのが趣旨。

選定のプロセスには、129 件の応募があった。応募理由、場所はどのところか、どういうまちづくりを展開しているか等を聞いた。実際に全ての現地を見て、各施設管理者(国立ならば、国立市)にヒアリング。富士山がどの位置に見えるか、そこにいったら、気持ちがいいか、いまはよくないけれどこれから良くなりそうか、そのための市民活動はどのようなもので、今後の展開はどのようか、などを検討。選定委員会を設けた(メンバーは地域づくり関連に長けた方、環境デザインの専門家など 8 名)。富士山の見え方だけではなく、地域の熱意があるところ、地域住民の活動があるところを選定(63 景)。国立市円形公園も選定された。

今回の選定はまちづくりのスタート。10 年、20 年かかるかわからないが、各地域で、富士見景観をきっかけに、持続可能なまちがあちこちに発生することが大切。

国交省は、スタッフも配属し、継続的な支援をしたいと思っている。地域づくり交流会を開催、まちづくりのアイデアの交換会になればいい。自分も今後ともかかわりたいと思っている。

(2) 小西氏

JIA の保存建築委員会で委員長になったとき、最初に関わったのが、国立駅の保存要望書を JR と東京都に提出したこと。大学の方では、設計しながら保存の方法を考えている。今は曳いて、登録文化財にして、その後戻す前提で話すことにしている。全国の曳きやの例を紹介する。

宇都宮市の道路拡張のため、野口雨情氏の家を曳きや。ベアリングで向きを変えた。

京都二条駅(明治 27 年建築)。高架のために曳きや、600 m²、300 トン、木造で、下を鉄骨補強、現在駅ではなく梅小路蒸気機関車館として活用。

JR 奈良駅(鉄筋コンクリート)。昭和 9 年築。典型的和洋折衷の建物。高架により取り壊しとのこと、もったいない、と県で保存。1,093 m²、鉄筋コンクリート 3,500 トン。一時間に 1 メートル、時計と反対に 13 度回転。

首相官邸。敷地内で南に 10 メートル曳いた。角度を変えて、鉄筋コンクリート、2 万トン、一秒钟 1 ミリの速度で曳いた。

宇都宮県庁舎(連続写真)。

これらの事例のように、曳きやは技術的に全く問題ない。

(3) 澤田氏

工学院大(後藤研究室)にて古い建物に関する保存にかかわる。国立は今日で 2 回目。住んでみたいと思う、素敵な街。

群馬県伊勢崎には 明治 45 年建築の約 100 歳の県最古の民間医院洋風建築がある。

所有者から市へ寄贈。市の重要文化財にして、市の敷地に 100 メートル移動（主要幹線道路をまたいだ）NPO として曳き家をイベントにして、30 の市民団体が持ち味を活かして、フリマ、食べ物などを販売。地域の子供が縄を引っ張った。模型をおき、活用計画もあわせて、市民の意見を聞いた。曳き家は恩田組が施工。

曳き家移転にあわせて伊勢崎タウンギャラリーを開催。黒羽内科医院のペーパークラフトをつくったり、子供たちが着物を着てパレードした。古い建物と直接関係無い部分もあるが、市民が色々なイベントをつくった。これをきっかけとして形を変えて、今も継続してイベントが行なわれている。普段、郊外に車で出て買い物をする中心市街地と縁遠い人たちが、曳き家というイベントによって中心市街地に足を運んだという経済効果もあった。

（４）小谷氏

グリーンネックレスでは地域の市民が中心となって、中央線高架化事業（三鷹 - 立川間 13.8 キロ）をきっかけとしたまちづくりの展開をめざしている。

高架化事業の区間は市によって異なる。例えば、最も区間の長い小金井市は約 4 キロ、一方、区間の短い三鷹市はわずか数百メートル、といったように。このため、事業区間の長短でまちづくりへのとりくみに対して地域に意識の差、視点の相違がある。そこで 5 年前に沿線 6 市長をパネラーに公開サミットを開催した。まず最初に高架で繋がれた中にまちづくりへのとりくみに対する共通点が見出せないか意識啓発の場をセットし、沿線が連携するには、また、具体の事業化等を図るにはどうすればよいか等を考え続けた 6 年だった。

5 年前のサミットのあと、市民と 6 市の担当者が集まる「連絡会」を立ち上げようとした。6 市をその都度個別に回るのはかなり大変だったが、準備会段階で各市から出席した担当部署も計画、緑政、企画などと異なり、議論がうまく進まなかった。そこで、とりくむべきテーマを仕分け、行政が対応しやすいような提案を自ら作ろうということになった。

たとえば、「雨水活用プロジェクト」が代表的なものの一つ。また小金井市内では市民により「高架化関連まちづくり市民会議」（グリーンネックレスが事務局）が立ち上がり、そのなかで東小金井駅は「森の中の駅」というテーマができた。情報発信のための「駅前新聞」も作られた。

こうしている間にプロジェクトが立ち上げる中で、最近では、街のつながりを生み出し、コミュニティを大切にしたい豊かな街が創造されるようなコミュニティビジネスをめざした、タウンサイクルの企画ももちあがっている。

また、今年 4 月から 8 月にかけて、「雨の学校」（各大学を廻って講座を開き、意識を高めるための環境普及活動）を開催している。このほかグリーンネックレスそのものの活動ではないが、メンバーが街の様々な人たちとのつながりの中で「だれでもトイレ」（だれでも使いやすいトイレ）の企画提案をしている。このように、多くの提案を大きな組織全体で進めるのは大変なので、個々のプロジェクトが半独立的に動いている。

以上のプロジェクトは、小金井を中心に行われてきたが、国立ではどうやったらいいだろうか。みなさんと一緒に考えていきたい。

(5) 武澤氏

米国系コンピュータ会社に勤務しているときは典型的な寝るだけ市民だった。その後NPO法人i-CANを設立。国立にかかわって5年になる。

駅舎保存の会は、国立駅周辺まちづくり協議会(9商店会)、国立市商工会、国立市商業協同組合、赤い三角屋根の会、トトロ実行委員会、とi-canの6団体が組織。保存のための募金を行ってきたが、目標に程遠い。やり方を考えないと。

商店と市民団体と考え方の違い、募金の仕方やり方に違いがあるが 駅舎を残したいという思いは一緒。

自分自身はハードのことや都市計画をしているわけではない。寝るだけ市民だったので、国立のことに詳しくないが、5年前にNPOを立ち上げてから、いろいろな問題に直面。商店主さんとうまくやることが大切。情報交換が大切と感じている。また、地域格差の問題もある。駅周辺と南部では、募金する額が違う。

観光まちづくりをやろうと考えている。市民全体が参加するコミュニティづくりをしたい、住んでよし、訪れてよし、の街に。そこから国立への来訪者が多くなる。

国立駅を国立のまち全体の中で、どのような位置づけにするか、南部の人にも色々説明していくことが大切。市民が納得した上で、進めることが大切。

(6) 林氏

大学という立場でどのように駅周辺のまちづくりにかかわっていけるか。

先程のお話のように、駅周辺だけの問題ではない。今回も「駅周辺まちづくりフォーラム」ではなく、「駅周辺から始まるまちづくりフォーラム」などとしたかった。

街にランドマークがあるのがいい街といわれている。結節点、すなわち人や情報の流れの結び目になっているものが、はっきりしている街がいいまち。国立駅はまさにランドマークであり、人や情報の結節点。そういう意味でも駅周辺だけでなく、まち全体で考えていく必要がある。だからこそ、自分も研究してみよう、と思った。

削除: 結接線

削除: 結接線

大学の役割は3つある。教育、研究、社会貢献。それぞれの観点で何ができるか。

研究...難しいというのが結論。教員は高い水準の研究を求められると、やっていくことが細分化され、統合する、総合するという動きがなくなってしまう。実践的なものに大学の研究力が適応できない。いつかは統合するような流れをつくりたい。

教育...大学とは人を育てることが使命。一橋は(法、経済、商、社会学部)社会科学の分野だが、都市工学、建築などは関係ない、と思っている面がある。それが専門分化しやすい、という状況とあいまって、地域のこういう問題に取り組もうとしてこなかった。それではいかん。総合力を持った人間を育てなければならない。

外大、東工大(土木工学科)、医科歯科大(公衆衛生学科)、一橋大(商学部の交通論、地域社会学など)と4大学連合構想で、生活空間研究講座を、4、5年前に立ち上げた。あまり成果は上がっていないが、一橋大学に入りながら、東工大に再入学したい、と思う学生もいるようだ。

(司会)

パネリストの方から出た話には

- 商業者と寝るだけ市民の問題
- 市民側の縦割りの解消の必要性
- 何のために駅舎を残すのか

などがあげられる。

駅周辺のまちづくりの協働のために、どういうことが必要か。南部と北部の問題かもしれない、商業者と寝るだけ市民の問題かもしれない、専門分化かもしれない。それぞれの立場からお話をうかがいたい。

確認ですが、市には現在、駅周辺のまちづくりへむけて、協議会などの体制は？

(是松氏)

現在ない。

(司会)

協働のための提案をパネリストから頂きたい。

(武澤氏)

駅周辺の整備のためには、国立全体をどうするか、トータルビジョン、コンセプトをしっかりと作ることが大切。7万市民に投げかけて、国立駅舎の位置づけをしっかりとさせていくことが大切、南部も北部も駅周辺には関係ないと思っている。知らせることが大切。寝るだけ市民と商工者とのコミュニケーションが大切。

以上のためにも観光協会を立ち上げたい。政治的に、超党派で、色々な市民が同じテーブルで議論することが理想的。

(林氏)

他人事ではなく、自分のことだと、如何に多くの市民が思えるか、共有できるビジョンが大切。共有ビジョン、自分のこと、という意識がないと、経済的手法もうまくいかない。

どういう風に協働するか、国立市にはJRの駅が他にもある(谷保、矢川)。それらとどう協働するか。ネットワークは？

国立音楽の森構想 兼松講堂、芸小ホール、KF まちかどホール(KF・・・国立富士見台人間環境キーステーション。まちづくり授業がまちに出て、地域活動拠点を作っている)など規模の違うホールをうまく連携させると、この構想がうまくいくのでは。

協働で言うと、以上のような仕組みをうまく作っていくことが大切。商業者も市民も、大学生もNPOも入ってくるような、協働できる場や仕掛けがどうやったらできるか。国立駅周辺だけでは限界がある。国立全体にわたる場づくりが大切。

(小谷氏)

とかく個々のケース、人々の集まりになると、一つの町、駅、単位ごとに物事を考えることが多くなるが、高架化事業が行われている三鷹 - 立川間全体でひとつの地域、という大きな視点で取り組めないかと思っている。例えば今日は小金井から自転車で17分程で来れたが、自転車で行動するとなると、一つの街を軽く越えてしまう。

全体を束ねる場合は、行政の中では、6市連絡協議会（都や JR も入っている）があるが、半年に1回か、数ヶ月に一度しかない。市民と行政（各自治体）をつなげたい、というイベントも開いてきたが、色々と温度差があって、協働の場を大きな動きを継続的に生み出すのは難しい。

小金井の例をあげると、グリーンネックレスでは駅周辺まちづくり協議会を作りたいと要請したが作られず、市ではこれに相当するものとして「JR中央本線連続立体交差事業関連まちづくり委員会」というものが立ち上がった。しかし、区画整理、再開発も含めた委員会であり、高架化に特化したものではなかった。そんな中、駅舎については、一昨年、武蔵小金井・東小金井駅舎のデザインについて、市民の意見も聴くという、「小金井・駅舎デザイン会議」が市によって開かれた。行政としては外観だけに絞ってのテーマだったが、駅周辺のあり方も含む多岐にわたった議論があった。「小金井・駅舎デザイン会議」が一段落したあと、ここに参加したメンバーが中心に「小金井・高架化関連まちづくり市民会議」ができ、商工業者も参加。内容は、駅前のこと、高架下のこと、南北のこと、トイレなど、色々議論できる場を作ろうとグリーンネックレスが事務局になっている。全体は緩やかなつながりとしつつ、ピンポイントで個々のプロジェクトが動くようになっている。

武蔵野市の例では、約10年前から「武蔵境 駅舎・広場・まちづくり協議会」が組織され、数百名が参加。市がバックアップしている。

国立では、大学との連携や市民活動の支えがあるように思える。行政と何らかの形で継続的な協議会が作れると良い。協働にはちゃんとした役割分担が必要。小金井市での経験から、金銭の有無は別として、ある種「契約的な関係」がうまく作れずに、あいまいさが残った。

（津久井氏）

富士見100景を選ぶときに市民活動があるかどうか大きなポイントだった。

129箇所を廻ったとき、市民活動のレベルが色々だった。行政があって、その下を離れない形や、あるいは完全に役割分担して、対等な立場のものもあった。役割分担ができるまでが大変で、きっかけとして、行政が、こういうまちづくりをやりますよ、検討会に集まってくださいと呼びかけ、集まった市民が自発的に会を立ち上げた形もある。

どういう風にうまく自分たちの意見を行政に伝えるか。行政がその市民をどのようにサポートしていくか、オンブに抱っこだと、支援が難しいが、役割分担が明確になれば、支援しやすい。

今の段階としては、市民はここまで、行政はここまでと役割を明確にしながら、こういう会を重ねることで、国交省も支援しやすくなる。

国土交通省の支援体制については、「私たちの地域づくり」という資料を参考にしたい。地域という面で見ると、個性のある地域は多い。関東に55の出先事務所があり、現在各都県の、2、3事務所に地域づくり相談窓口を設けている。東京ならば荒川下流事務所など（できて1年）。市民参加で道路をきれいにしたい、など地域づくりのイメージはそれぞれ。困ったことがあればなんでも相談して欲しい。地域の方のやる気のあるところには、

どんどん支援していきたい。これやって、あれやってではなく、こういうまちにしていきたい、という思いを支えたい。お金のことも相談に乗りたい。

(司会)

思いがあるけど、思いの同じ人はどこにいるのかが見えない。また見えていても同じ思いの人がなかなか一緒にならない。思いを伝える努力もしなければならない。一緒にやるのは大切だが、どういう場が大切なのか、仕掛けを考える必要がある。

会場に国立市の基本構想(まちづくりの思いを形にしたもの)を作成している方がいる。

(会場)

第4期基本構想の市民提案を作ろうと1年やっている。基本構想は駅周辺のことだけでなく、まちづくり、市民がかかわることを殆ど全て(福祉、教育、子育てなど)についてまとめて、審議会に出しているところ。駅周辺についてもまとめてある。自転車の似合うまちづくりのため、検討会などの提案も行なっている。

(司会)

自転車の似合うまちづくり、駅周辺から車を減らしていこう、など、他の方に思いを広げ、つなげる、一緒にやる場づくり、きっかけ造りが必要。提案されている駅周辺を一日でも再現できないか。曳きやなどで駅が動く、びっくりさせる、映像もきっかけ造りになる。きっかけの場造りについて

(澤田氏)

小田原の国府津 商店街が寂れて、シャッター通りと呼ばれていた。商工振興会などと共催で商店街にある古い建物をイベント会場にした、昔の街の魅力を再発見する1週間のイベントを行なった。イベントは、牛乳屋さんで牛乳を飲んだり、昔の思い出を発見するなどの試みだった。イベント自体は古い建物、街並みを残しましょう、という意味合いだったが、結果、色々な人がまちづくりに参加する場となった。古い建物を利用したまちづくりの事務所のスペースに、色々な人がやってきて、そこにいる学生が市民の話聞いたことが、手作りの絵本の会など、色々な会が顔をあわせる結果を導いた。これがまちづくりに生かされ、商工振興会の会員数が、20、30と増えている。JRの駅長さんも会員になった。学生という立場は垣根がないので、イベントでの役割が大きいのでは。

(小西氏)

日本建築家協会では色々な保存の建物にかかわっている、東京駅、駅以外の建築物など。保存のために色々なことをする。要望書を出したり、見学会をしたり、市民の方と話したり。実際に使っている人、周りでその建物を知っている人が、強く、残したいという思いで行かないと残せない。

国立にかかわって、その前までの話は知らないが、駅舎を中心に街づくりがだんだん盛り上がっている、と感じている。おもしろい歴史ある建物である駅舎が、シンボリックな位置に建っていて、形もシンボリック。残すのは曳きやなど何とでもなろう。

どう残すのか。東京駅は最初は壊そうとJRが言い、市民からものすごい数の署名が集まった。そこでJRは残すことにし、壊してレプリカを作ろう、という提案がなされたが、と

んでもない、という声がおこった。

東京駅は建築当初と現在は形が違う。昔の形に戻して残そう。あるものを残して、補強しながら、当時を再現しようということになった。

国立駅も似ている点がある。形が少しずつ変わっているが、当時の図面もある。残すときには、曳きやすくなるにしても何にしても、本物であることが大切。いいものというのは時間が経つにつれて、価値が上がるが、残し方を間違えると、風化して、次には壊しちゃおう、ということになりかねない。できるだけ、無理をして、良い条件で残すようにしたほうが良い。

(司会)

小西先生には、専門家の立場から文化財ということを踏まえたご支援がいただけそうだ。

第3部 経済的な問題

(司会)

駅周辺のまちづくりにはお金がかかる。

(上原市長)

描いたものを実現させるには、100億でも足りないだろう、しかし100年の思いをかけて描いたものは、100年かけて実現すればよいと考える。大切なのは持続する皆の思い。今日色々な方の意見を伺って考えるに、国立全体のビジョンを語りながら、協働する力とか、その力を持続させるには何を持ってきたらいいのか、その中心になるのは、広場(駅前広場)だろう。

広場というのは、文化の力、経済の力など、色々な力を生み出す場。日本にはそういう広場がなかなかないが、国立にはもともとそういう力を持った広場があった。森の駅構想の中、広場を再現しようよと、みんなの最大の目標にしていけば、そこから経済が生まれる。商店街も参加する。寝に帰るだけ市民も力を得る。発表したい市民には発表の場を与える。ヨーロッパの広場とはそういうもので、活力を生み出してゆく。もともと国立にあった広場を協働作業で取り戻す大きなチャンスが来た。曳きやはものすごいイベント。これをやれるチャンス。みんなが曳きやにむかって1つの盛り上げを作って、お金も知恵も手も出す。そういうことを出発点に広場を再生して行こう、そのためには交通網を変えようなど、いろいろな構想が出てくる。お金はかかるけど、産み出すのも知恵。国交省の方も、やる気があればお手伝いするとおっしゃってくれた。チャンスが来たという思いがみなぎってきた。夢は夢のままにしないで、次のステップのためのエネルギーにしたい。

(津久井氏)

景観法(良好な景観の形成を促進)が昨年12月に施行(平成17年6月全面施行)された。色々なプランニングがあるが、ひとつは、景観行政団体であれば、景観計画をつくってそこを景観地区に定め、その地区計画をプランニングすることによって、その場所を景観法に基づいて支援していこう、という仕組みがある。(景観形成事業推進)

街づくりする上では、当然、道路も造らなければならない、土地も買わなければならない

い、建物も改造しなければならない、公園も作らなければ、と色々な事業がある。国交省も縦割り、都市局、河川局、道路局などと分かれていて手続きが煩雑となる。まちづくり交付金は、パッケージで計画（プランニング）を作ってもら。街をどういう形にしたのか、精査し、そこに交付金を出す。

（小谷氏）

グリーンネックレスでは、雨水をためて商店街の花木に自動的に散水する装置を「雨だるま緑化基金」と名付けた基金を集めながら設置した。これは、高架橋に応用するためみんなががんばるものを作っていこうという試み。去年の1月に設置し、現在も稼働している。この発想を高架橋に展開してもらえよう、今年2月に開催された都・6市連絡会議でもグリーンネックレスとして提案を出して、資料を配布してもらった。高架橋に降った雨の利活用にはレベルが色々あるが、一番高いレベルでは、高架橋から溜めた雨水を周辺に持っていき、ビオトープを作りその水資源に利用しようというもの。小さなレベルでは、鉄道を南北横断する箇所には、街のゲートのような植栽のための雨水活用装置をつくらうというもの。これらは、レベルごとに粗々ながら、それぞれどのくらいの費用がかかるか、数値目標をつくっている。又そのためにお金（財源）をどうやって集めるかも考えている。実現に持っていくための活動資金としては、毎年、内閣府の全国都市再生モデル事業調査に応募している。去年・今年三鷹市から推薦もらった。（補注：一昨年は都市計画家協会の専門家派遣を得て、関係者調整会や基礎調査を行った）

「雨だるま緑化基金」の場合、一口1万円の募金を個人、商業者、市民グループ等から集めた。お金は、何のために使うよ、という目的別に集めると、わかりやすいのではない。例えば、曳き屋のため、駅周辺の緑化のためなどといったように。

（司会）

お金をかけない駅舎保存活用のやり方は？

（小西氏）

東京駅を元の形に戻す。かなりお金がかかる。国立駅も当初の形に戻す。お金がかかることもある。変な直し方、残し方をするよりも今のままそのまま、曳きやしてもとにもどすのかどうか、わかりませんが、あまりいじらないでおくほうが、お金を無駄にかけなくていい。もしお金を出せるなら、いい形で記憶するとか、いろいろな形が取れる。確実にいい、と思う方法でやらないならば、やらない程、費用を無駄使いしない。

JRと離れて残す話が出ているが、駅というのは、改札があって、事務所があって、通路があって、階段があって、トイレがあって、ほとんどそれだけ。しかし、今上野駅など、いろいろな駅で、商店があったり、色々な施設が駅の中にできている。国立で成り立つかどうかは考えなければいけないが、駅に対する付加価値をみんなで考えてアイデアを盛り上げて提案する形にすれば、必ずしもJRと分かれて残すのではなく、ただに近い方法で元にもどるといっても全くない話ではないだろう。

（司会）

お金を産み出すことを考えるときに、その整備事体がお金を生み出せないか。

（澤田氏）

お金を産み出すことに、具体的なデータがないが、伊勢崎では曳き家がイベント化した。国府津でもイベント。そこで売り買いが発生し、活動資金ができた団体もあったと思う。最初は誰かが主導したところへ乗ったが、次は自分たちが主となって、さらに来年再来年と続いている。こういうことは初めはともかく、長期的には手弁当だけでは続かない。集まることで、大きなイベントも催すことができ、同時に自分たちの会の宣伝にもなる。会を重ねるごとに参加が増え、継続しているということは、何らかの経済的な効果があったのだと思う。

(武澤氏)

国立駅周辺を森の駅にする、という構想は経済効果がありそうだ。資金に関しては、PFIとか、やり方も色々あるだろう。一体幾らかかるのか、実際的な試算もしてみたい。

(司会)

お金をあつめるくふうもあれば、その活動によって街自体の価値を高めていくこともある。国も地域が盛り上がれば支援してくれるとのこと。お金を産み出す手法の一つとして、市民債がある。

(会場 赤い三角屋根の会スタッフ)

全国の市民による資金調達の例を探ってみた。

千葉県我孫子のオオバン我孫子市民債は去年の秋、発行された。住民参加型のミニ市民公募債。(地方債・・・地方公共団体、自治体が発行する債券。自治体がおこなう借り入れ。)自治体自体にお金がないとき、投資家を募って出してもらい、債券を買ってもらうのが地方債。我孫子市にある古利根沼の保存にあなたのお金を活かしてみませんか、この市民公募債は資金の使い道を明らかにしたうえで、公募することにより、市民の皆さんに街づくりへの関心をより高めていただくもので地方債の新しい形として...と説明されている。

債券なので当然多少の利子がつく。0.58%。国債が0.8%、それよりさらに低利子にもかかわらず、応募殺到と記事に書いてある。この債券は、資金を活かすだけでなく、市民の沼や、町に対するおもいを活かしたい、ということで人気が出た。市民債は資金調達の形の一つ。同時に、みんなの思いを形にする一つの方法でもある。

市民債という形で調達が始まったのは、4年前頃から。10億の発行額、現在は全国で3,200億円が調達されている。

(司会)

借金なので返さなければならないという問題もある。

(林氏)

お金の出所は色々あると思う。駅周辺に関しては一つの団体がまかなえることではない。都の事業であり、市の事業である。国からも助けてもらえそうだし、市民債もある。償還が5年、返せるように考えなければならない。

資金調達の方法として、返さなくていいやり方、企業では資本金を出資してもらいやり方がある。株式会社の形式。これは償還はないが、業績を上げて、配当を払わなければならない。

寄付もある。最近の注目すべきは、ビル・ゲイツのようなIT長者の寄付のやり方。寄付

の会社（組織）をつくり、お金は出すけど、口も出す。どういう目的でこのおかげがつかわれるのか、どういう成果が上がったかの説明責任を求める。もし、国立がこういう新しいタイプの寄付者の目に留まれば、かなりの資金調達源になる。

株式会社形式について、イギリスのレッチワースでは、株式会社をつくり、土地を買って、商工業者、農民、住む人に貸す、という形態。資金を集めて、最初の5年は配当が0だった。それから1%、10年くらい経って5%になった。時間がかかることである。

100年の計は100年かけて、時間をかけてお金をキープできるならば、そういうやり方もいいのでは。配当が低くても、儲かるか、儲からないかだけでは集められない。参加意識、まちへの思いが加わってお金が集まるのだろう。思いを集められるかどうかは問題では。それだけ聞けば手段はいろいろある。

（司会。今までのまとめ）

まとまることが大切といいながらまとまらない。まずは将来像を共有することが大切。共有するために、目標像をつくろう、仕掛けが大切、曳きやも活かす。お金に関しては、地域の思いを集める、産み出すにつながる。そして地域の思いが集まることで、地域の整備や駅前の価値自体を高めることになる、そういう視点もある。

（10分休憩）

第4部 意見交換

ポストイット意見まとめ

- 何のために駅舎を残すのか、考えなければいけない
- 駅舎を失うと、市民が失うものは何か。
- 「何のため」につながるものとして、目的意識を共有することが必要、共有する場を設ける。誰がどうやって？みんなの思いを一つにするイベント、PRをもっとする。
- 他人事ではない、自分の問題としての意識付けをしなければ。
- 役割分担が大切、それぞれの立場 - 行政の立場、商業者の立場、JRの立場、で動くことがある。
- 行政、市民、商業者、どのような良好な関係を築けるか？
- 当事者（JR）に参加してもらうには？
- 将来ビジョンは考えていく。市民、行政、協働。たくさんの市民の意見を聞いては八方美人。
- 行政だけではがんばれない（心配）。
- プロジェクトチームをつくる、リーダーの出現が必要
- 駅周辺まちづくりのポイントは 景観軸と観光（沿線の他都市との連携）。
- 予算について 国、自治体の支援をもっと考えよう。

- イベントだけでなく、経済的な側面も考えなければ。美術館を作ろう、など多様、多数の意見。

(司会)

国交省ガンバレ、と書いたのは？

(会場)

行政に頼るだけでなく、思いがあるものでがんばれないかと思っている。誰かと一緒にやらなければ。

(司会)

国交省の方が、熱意は伝わる、とおっしゃっていた。熱意を伝える場を発生させたい。お金をかけないで、熱意がまとまっていることを伝えられる場をつくりたい。

プロジェクトチームとは？

(会場)

地権者、商業者を入れたチームを造りたい。皆さんの目標は森の駅だけでいいのか、と疑問に思う。商業も栄えなければいけないだろう。まち全体が活性化し、人も潤う。手法は色々あると思う。駅周辺、駅舎だけでなく、まち全体みんなの意見をまとめ、例えばケース 1 を実現するために、この指とまれ！とプロジェクトチームを早期に作っていくのが大切。

(司会)

イベントについて。

(会場)

イベント、街の姿を実現するためのイベント。商業者の方にも、寝るだけ市民にも魅力的なイベントを行ないたい。一日だけでも実現し、みんなで力をあわせて感じる体験をしたい。都市再生モデル事業に応募している。社会実験がしたい。

(司会)

みんなが色々提案しているけれども、それが広まっていない。共有することができれば、イメージもわかりやすい、普通の人も振り向く。そのためにいろんな人が力をあわせなければ。

(中町)

今回のフォーラムは藤田記念まちづくり企画支援事業の対象事業となっている。全国で4箇所選ばれた。この助成を通じても熱意を伝えたい。

(司会)

学生の立場として、誰か発言は？

(会場)

学生の立場でKFに参加している。その活動を通じて感じているのは、教授、商業者、市民活動、それぞれ微妙に利害が違う、だからこそ、利害関係のない人間が間に入る価値があると実感として思っている。駅周辺も同じだろう。学生は4年という限られた時間だが、学生だからできることがある。一回に大きなことをしやすいのでは。

(司会)

最後にパネラーから、感想など、一言ずつお願いします。

(小谷氏)

(高架化にともない取り組もうとしているまちづくりの対象に対して)単年度でなく将来に渡ってその場所をどう使い続けるのか、事業としてどう続けるのか、長期的なスパンで考えられるようにしたい。活動としては楽しくやりつつも、自分自身を追い込むくらいの気持ちで、沿線地域のまちづくりとして前に進めていけるようにしたい。(今日集まった人達の活動が多くつながることで、高架化される沿線の街がより豊かになっていければと願っている)

(澤田氏)

学生は地域の利害や垣根のない存在で、緩衝材である。学生のときの体験、出会った人たちとその後長く付き合っていくことができるという、おまけ、お土産がある。ぜひがんばってください。

(武澤氏)

さきほど来、観光まちづくりを申し上げている。文化の香りのするコミュニティをつくらう。そのためにやれることからやろう。観光まちづくりの出発として、まちにチューリップを植えている(国立商業協同組合と一緒に)。音楽のまちにしようと、兼松、KF ホール、芸小ホール、郷土館をいつでも使おう、と呼びかけている、将来的には通りにストリートミュージシャンがいるようなまちに。

(津久井氏)

こういう集まりには、初めて参加した。今日は温かい空気を感じた。今、自分は関東地方全体の30年後をどうするかに、取り組んでいる。住んでいる人がこの地域をどうするか、中心になって考えていくことが必要。「国交省は、また訪れてみたい地域づくり」を目指している。このような会があればいつでもくる。側面的に支援していきたい。

(林氏)

主催する側として色々勉強した。これをきっかけとして、大学内に研究、勉強の拠点を作って行きたい。学生だけでなく、市民の皆さんが参加し一緒に勉強したい。そのアナウンスをしたい。市長が広場の再生、といていた。駅舎だけでなく、その空間が大切だ。街の象徴的な形になって現れるものが広場。広場というものがどういうものかなかなかわからないが、ヨーロッパに2年住んでみて、それがやっとわかった。

今までの日本に無いような、新しい形の広場。みんなが集まり、そこで文化が栄え、商業が集まる広場ができないか。それが国立にできれば素晴らしい。円形公園を買い取って、みんなの広場ができればもっといい。

(司会)

今日はありがとうございました。本日の内容を東京都、関係機関、商業者の皆さんに報告していきたい。駅周辺を、単に原っぱというのではなく、文化の営みのある広場の再生

を目指して、目に見える形としてみんなで実現させていく、ひとつでもできることを共有したい、そのためのイベントを一日でも実現させよう、ということについて、皆さんの賛同を得られたと思う。ありがとうございました。

(最後に三角屋根ケーキをパネラーに配る。終了 午後5時10分)

このフォーラムは、社団法人再開発コーディネーター協会 平成17年度「藤田記念まちづくり企画支援事業」の対象事業として支援を受けている。

(以上テープ起こし、文責 赤い三角屋根の会)

